

第 17 章「智慧の完成（般若波羅蜜）」 p. 242-23～p. 243

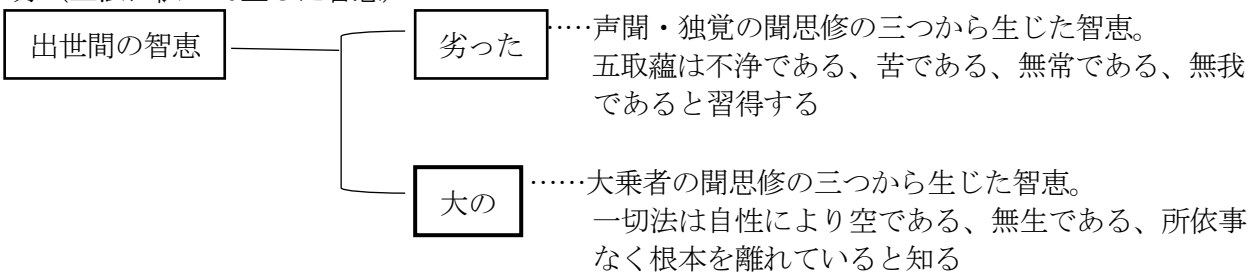
●この章のおさらい

P. 235 智慧の区別

- 1) 世間の智慧（はんにゃ）
- 2) 劣った出世間の智慧（はんにゃ）
- 3) 大の出世間の智慧（はんにゃ）

世間の智慧 ……^{いほうみょう}医方明（医学）、^{いんみょう}因明（論理学）、^{しょうみょう}声明（文法学）、^{くぎょうみょう}工巧明（工学）

^{ないみょう}内明（正法に依って生じた智慧）



p. 236 智慧を知るべきこと

大の出世間の智慧について、六種類の義により説く

- 1) 事物〔・有〕だと執らえることを否定する（人我・**法我**を否定する を学びました）
 - 2) **非事物〔・無〕だと執らえることを否定する**
 - 3) **無いと執らえることの過失**
 - 4) 執らえること両分の過失
 - 5) 解脱することになる道
 - 6) 解脱の自性〔である〕涅槃
- 本日はここを学びます

自性…（らんしん）あるもの A を特徴づける B のことをいう。（ガルチェン協会 HP 野田：12.解脱の宝飾）

自相…（つえんに）性質のこと（ガルチェン協会 HP 野田：12.解脱の宝飾）

●「法」とはなにか（小倉さんの資料（HP25）を参考にさせていただきました！）

法…（ちょ dharma）

（岩波仏教辞典第二版）

dharma（ダルマ、達磨）は〈保つ〉（✓dhr という語根から成立した言葉で、〈同じ性格を保つもの〉〈法則〉〈行為の軌範〉などの意味がある。（中略）

- 1) 法 則・正義・軌範,
- 2)*仏陀の教法,
- 3)*徳・属性,
- 4) 因いん,
- 5) 事物およびその構成要素,

の5種となる。このうち、仏陀の教法と、事物（構成要素）とを〈法〉ということ（後略）

ガルチェン協会 HP 翻訳者ノート野田俊作：13.解脱の宝飾より

インド論理学が「有法（dharmin）に法（dharma）がある」という構文でものを考えるときの使い方で考えるべきだということです。たとえば、「花は美しい」とわれわれだったら言うところを、インド人は「花に美がある」というように言いあらわすのですが、このときの「花」が有法で、「美」が法です。あえて現代語に直すなら、有法は「もの（存在）」、**法は「ありさま（属性）」**だと考えていいでしょう。（中略）「法」という言葉を見れば、いつでも「有法に法がある」という構文を思い出して、それに従って「ものの属性」と理解するのがいいと思います。けっして「もの」と理解してはいけません。

ちなみに、英訳は「all phenomenon」と訳していますが、さすがだと思います。

●空性の解釈について（東さんの資料（HP26）を参考にさせていただきました！）

宗義書にある古代インドの四つの学派の見解*1 p.127～

*1 p129-1より引用 宗義書に述べられている無我には、大きく分けて二つの種類、つまり「人の無我」（人無我）と「現象の無我」（法無我）がある。この場合の「人」とは、自己に対する私たちの強烈な感覚、つまり「私」のことをさしている。またこの場合の「現象」とは、主に人の精神的・物質的集まり（蘊）のことをさしているが、それ以外の現象をも広く含んだ概念である。

人無我のみ

説一切有部	「永遠で、単一で（=部分を持たず）、自在なる力をもつ（=他に依存しない）自我」を否定（粗いレベルの人無我）、「独立自在の実体のある自我」を否定（微細なレベルの人無我）（*2 p124）⇒人我の否定 五蘊や、現在・過去・未来という三世など、人以外の現象は実体を持って成立していると主張。内なる意識、外界の対象物、主体と客体も、部分を持たない最小単位の集まりであるとする。（*2 p139）⇒法我の肯定
経量部	

人無我と法無我

唯識派	外界に存在する対象物の実体は存在せず、ただ自分の意識の反映として現れているだけである、と主張（*2 p151）意識は実体のある真実として成立していると主張（*2 p151）⇒人我・法我の否定/「意識」の实在の肯定
-----	--

中観派	外部対象について究極の探求をしてみると、その実体がどこにあるのかを見出すことができないのと同じように、意識についてもその究極のありようを分析して探求してみると、これが意識であるという指をさして示せるような実体をどこにも見出すことはできない。（*2 p157） ⇒「意識」の实在の否定
-----	--

「人以外のすべての現象を対象とする我執（法我執）は所知障であるため、一切知を得るための障りとなるものであるが、私たちが輪廻をさまよう因ではない。これに対し、人を対象とした我執（人我執）は煩惱障であり、これが輪廻の源である」と主張。（中略）唯識派と中観自立論証派は、法無我と人無我は別個のものにとらえて、（中略）法無我は微細なレベルであり、人無我は粗いレベルであるという違いがあると主張。（*2 p.218）

ちゅうがんじりゅうろんしゅうは 中観自立論証派	世俗のレベルにおいてのみ自相による成立があることを受け入れており、それ自体の側から成立しているような現われがあり、世俗のレベルではその現われのように成立している、と主張（粗いレベルの解釈）（*2 p195） 法我執は所知障と主張（*2 p.88） ⇒「究極のレベル」の实在の肯定
----------------------------	--

ちゅうがんきびゅうろんしゅうは 中観帰謬論証派	世俗のレベルにおいても究極のレベルと同じように自相による成立は存在しない、という主張。（微細なレベルでの解釈）（*2 p195） 法我執は煩惱障という立場（*2 p.88） ⇒「究極のレベル」の实在の否定
----------------------------	---

煩惱障と所知障

所知障について、チベットの賢者たちは、「二つの真理（世俗の真理と究極の真理）の本質を別個のものとしてとらえる汚れである。」と述べています。つまり、すべての知るべきものである「二つの真理」を、ひとつの心で同時に見抜くことを妨げている障りのことを所知障と呼んでいます。

そこで、所知障の本質は何かと言うと、「ものの実体にとらわれてしまう心が残した習気、つまり、煩惱障の残り香である」とされており、所知障とは、「二元的なものの現われ（認識主体と認識対象）に惑わされてしまう心の汚れ」のことなのです。（*2 p.88-89）

空とは…

「空」の意味は「縁起」であり、他のものに依存して生じるというすべての現象のありよう。
それ自体の側から独立して成立しているのではない、という存在のありよう。（* 3 p.92-93）

空性（とんぱに）とは…

言葉で仮説しただけで、実際には存在しないこと（ガルチエン協会 HP 野田：12.解脱の宝飾）

それぞれの立場・主張を確認しておく…

* 2p.221

「五蘊とは別個に独立して存在する自我はない」ということのみを明確に理解し、確信を得ている人の心の連続体の中には、「人は五蘊に依存して独立自存の実体を持って存在している」というとらわれが生じてくることがあります。⇒非仏教徒的な理解

さらに、「人は五蘊に依存して独立自存の実体を持って存在しているのではない」というレベルの無我までを明確に理解し、確信している人の心の連続体の中には、形あるものなどを対象とする執着や、形あるものを実体視してしまう心が生じてきてしまいます。⇒説一切有部・経量部の理解

同様に、唯識派の空の見解を持つ人が、「外部対象は真実の成立として存在しているのではない」というレベルの無我までを理解して、その見解が影響を及ぼしている間は、「意識は実体のある真実の存在である」という本来的なとらわれがまだ生じてきてしまいます。⇒唯識派の理解

そして、中観自立論証派の見解による空の意味を理解している人は、「究極的な意味において真実の生成はない」ということを明確に理解していても、世俗のレベルの現われは真実の存在として現れてきてしまいますし、その現われ通りにとらえて執着を起こしてしまうという、微細なレベルにおけるものの実体をつかむ心がまだ生じてくるのです。⇒中観自立論証派の理解

しかし、中観帰謬論証派の見解による空の意味を理解している人は、「世俗のレベルにおいてもそれ自体の特質による成立は存在していない」ということをはっきりと理解し、その見解が心の中で強い力を発揮するようになると、その人の心には、中観自立論証派以下の哲学学派の見解を持つ人たちがとらわれているような、ものを実体視する心が起きてくることは決してありません。⇒中観帰謬論証派の理解

この段階に至ると、対象物の実体にとらわれる心はすべてなくなり、完全に滅したことになるので、すべての現象の実体にとらわれてしまう誤った認識が生じてくることはもうありません。

しかし、中観帰謬論証派の見解を超えて、さらに対象物の否定を進め過ぎてしまうと、いかなる現象もまったく存在していない、という無辺の極端論に陥ってしまう危険があります。←本日学ぶところ

野田俊作の補正項

「瞑想について（5）」2013年11月25日（月）より <http://jalsha.cside8.com/diary/2013/11/25.html>

チベット仏教の中でカギユ派は、マハームードラということを使う。これは、私が理解している限りでは、次のような考え方だ。（間違った解釈を人に教えると地獄に墜ちるんだそうで、まあ地獄巡りもよからうかと思って書いているが、地獄はちょっとイヤではあるな）。まず、宇宙には唯一の法身（ダルマカーヤ）があると考え。それは、ただひとつの意識、あるいはただひとつの生命だ。宗教学的に言えば、有神論というよりは汎神論だ。仏教は、世界を、衆生世間（精神世界）と器世間（物質世界）に分けて考えるのだが、衆生世間は法身に満たされている、あるいは衆生世間はすなわち法身だという思想だ。

われわれも衆生であるから法身の一部なのだが、無限の過去のあるときに我執を持って、「ここからここまでは私、ここから向こうは私でない」と分別したらしくて、その業で法身から切り離されて、そうして「私」というものになってしまった。大昔の間違いで「私」はできて、その後もずっと間違い続けているから存在し続けており、いつか間違いを正して我執を捨てると、「私」は消滅して法身に融けていく。

「私」が「私」でいる間は、「これは私のもの」と言って物質を集めて身体を作る。そうして作った身体は、諸行無常であるから、やがて古びて散って行き、死んでしまう。そうすると「私」は精神だけの存在となるが、性懲りもなくまたもや物質を集めて身体を作る。こうして「個」として輪廻転生

する。

我執をもって個となって輪廻転生することの具合の悪さは、「これは私であり、これは私でない」という分別から苦が生じることだ。すべての苦は我執から生じる。だから、我執を持った「私」が個として輪廻転生している限り、私はいつも苦の中にある。我執を捨てて、唯一の法身と一体化したときに、苦から解脱し、同時に個としての輪廻転生に意味がなくなる。

マハームードラ思想は、歴史的には成就者（シッディ）と呼ばれる在家行者の間でできた思想で、それがやがて出家教団にも広がった。だから、アカデミックな起源のものではない。それで、正統派、たとえばチベットだとゲルク派、からはうさん臭い目で見られている。永遠不変の不二のダルマカーヤなんて、諸行無常の仏教の前提にも反するし、一切皆空の大乗仏教の前提にも反するではないか、というわけだ。いや、ごもっとも。しかし、反論できないことはない。

まず、いつか私が悟りを開いて仏になるとする。そのとき、いまの私の意識は、法身である宇宙の意識に受け込むのだけれど、しかし生き仏として肉体を持っている間は、なお私の意識は「これは私だ、これは私でない」と分別するだろう。肉体を失って始めて完全な涅槃（般涅槃）に入ることができると。その肉体を持った仏の意識と今の凡夫である私の意識は、ある共通性がなければならない。つまり、悟りを開くと、ある面では私は私でなくなってしまうのだけれど、それでもなお肉体を持っている間は凡夫の私と共通の部分があるはずだ。その部分は、いわば、凡夫の私の中にある「仏の種」だ。これを如来蔵という名前と呼ぶ。

私の如来蔵が完全に我執を捨て去ると、法身（ダルマカーヤ）になる。私の如来蔵も法身になるが、あなたの如来蔵も法身になる。法身になったときには我執がないから、私とあなたの区別もなくなる。そうして一切の衆生の如来蔵が我執を捨て去る日が来ると、世界にただひとつの法身だけが存在することになる。

それでは、その法身は現在は存在しないのかということ、現在も如来蔵という形で個々の衆生に分有されて存在している。しかも、「ここまでは私、ここからは私でない」という我執は衆生の分別にすぎないから、ほんとうはいまでも唯一の法身が存在しているだけだ。ひとつの羊羹をふたつに分けて「ここまでがヨウで、ここからがカンだ」と言っているような話で、個々の衆生が別々に存在していると考えるのはナンセンスなのだ。存在しているのは、ただひとつ、不二のダルマカーヤだけだ。以上、証明終わり。

ゲルク派は、この論証には納得しないと思う。私も、彼らが言う自空説、すなわち「一切の法は（如来蔵や法身まで含めて）空である」という説に、理論的には賛成だ。しかし、現場で瞑想していると、その説はいかにもわかりにくい。そこで、他空説、すなわち「法身や如来蔵を除いた他の法すべては空である」を仮に信じることにする。これは瞑想の手がかりとしてはきわめてわかりやすい。仏教用語を使うと、自空説が了義で他空説は未了義なのだが、迷える衆生を救済するための方便としては、他空説を採用するのも悪くはないだろう。

「グル・ヨーガ」 2013 年 07 月 23 日（火）より <http://jalsha.cside8.com/diary/2013/07/23.html>
一連のセッションで、ガルチェン・リンポチェが教えようとしていることの全体像は理解した（と思う）。後は 2 つ仕事があって、ひとつはもちろん実践することで、もうひとつは、リンポチェの教えを私の仏教理解の地図の中にきちんと位置づけることだ。地図の中に位置づけるというのは、カギユ派は「松中さん」で如来蔵派なのだが、それと「松下さん」や「松上さん」との関係をはっきりさせておく、ということだ。

松下さんというのは、穢れた衆生の世界と、清浄な仏の世界があるという、二元論的な立場だ。これに対して松中さんは、実は清浄な仏の世界だけしかないのだが、衆生がそれを勝手に穢れたものと誤解しているという一元論的な立場だ。松上さんは、穢れているとか清浄であるとかいう議論そのものが間違っていて、一切は空だとしか言いようがないという立場だ。チベット仏教には松下さんはいないが、歴史的に見ると、上座仏教だとか唯識思想だとかがこれだ。カギユ派は松中さんで、清浄な「ひとつの心」があるというが、その「ひとつの心」のことを「空性」ともいうので、「空性そのもの以外のすべては空である」と主張している。これを「他空説」という。これに対してゲルク派は「自空説」で、「空性もまた空」すなわち「仏もまた空」と主張している。

（参考）他空説と自空説については、ガルチェン協会 HP 野田：22. -23 解脱の宝飾にもあります。

●ここから本日の本文 p.242～に入ります

非事物だと執らえることを否定する

そのように、[有為の] 事物だと執らえることを否定してから、第二の義：[事物として無い、有為の] 非事物だと執らえることを否定するには、

もし、その[人・法の] 二我がどんな[有為の] 事物としても成立していないので、[無為の] 非事物[ただ] 一つであるのか、というと、

それは、[無為の] 非事物としても成立していないのです。どのようにかというと、二我または心それは、前に[有為の] 事物として有ったのに、後で[正理により観察したことから] 無いのであるなら、「非事物」というべきです。[しかし、] 二我または心といわれる法は、本来自性により成立していないから、事物として有ることとの辺[・極端] を越えているのです。

サラハパは『無尽蔵の口訣の歌』(訳註 39) に、「事物として執らえるのは牛と似ている。[事物として無い] 非事物として執らえるなら、それよりもまた愚かです。」と説かれています。『入楞伽經(にゅうりょうがきょう)』(訳註 40) にもまた、「外側は事物として有る[のではなく]、無いのではない。心もまた摂取されたことが無い。見すべてを捨てている—それが、無生の相です。」と説かれています。『宝鬘』(訳註 41) にもまた、「事物を得ないとき、なぜ非事物[を得ること] になるのでしょうか。」と説かれています。

『楞伽經』(りょうがきょう、梵: Laṅkāvatāra Sūtra, ランカーヴァターラ・スートラ) とは、中期大乘仏教経典の一つ。如来蔵思想と唯識思想が説かれる。Wikipedia より

* 2p.200-201

有と無の極端論を滅する中道の見解

57 黒砂糖は甘く

火は熱い[のが本質である] ように
すべての現象の自性(本質)は
空であると言われている

58 自性は空であると言う者は

虚無論を述べているのではない
それによって
永遠論を述べているのでもない

ここでも、主体である意識と客体である対象物の間に何も違いはなく、すべての現象は自性による成立がない空の本質を持つものである、ということが述べられています。空とは、何も無いということではなく、永遠に存在しつづけるということでもない、と述べることによって、ないという極端論(無辺)とあるという極端論(有辺)の両方を滅して、中道が説かれているのです。

何故ならば、空とは、すべての現象の本来のありようのことであり、そのような本質を持つ土台とな

る現象は存在しなければなりません。土台となる現象と無関係に、そのものの本来のありようや本質を語ることはできないからです。

そこで、「すべての現象はその自性によって成立しているのではない」と言う時、「それ自体の自性によって成立している」という永遠不変の存在を説く有辺の極端論を滅しています。

この言葉はそれと同時に、すべてのものはまったく存在しない、と言っているのでもありません。「自性による成立」が存在しないと言うことによって、まったく存在しないという無辺の極端論に陥る可能性を滅し、すべてのものは確かに存在していることを示しているのです。

*3 p.101

ツオンカパは、非常にすぐれた賢者であり、中観派の見解を大変詳しく分類されています。

「ある」ということと、「ない」ということには、それぞれ二種類あることを知って、それをはっきり区別するべきである、と述べられています。

これは大変重要な点です。世俗のレベルにおいて「ある」ということと、「自性による成立がある」ということ、そして、「自性による成立がない」ということと、「まったく存在しない」ということ、この四つの事象をきちんと区別するべきである、といわれているのです。

*3 p.202

何でも縁起によって生じるもの

それを空であると説く

それは〔他に〕依存して仮設されたものなので

それはすなわち中道である

『中論』第二十四章 第一八偈

これらのお言葉が示しているように、釈尊が説かれた深遠なる空の教えは、縁起を意味しています。すべてのものは他に依存し、他との関わりを持つことによって生じているという縁起の意味こそ、深遠なる空の意味なのです。

他に依存しているということは、それ自体の力によって成立しているではありませんし、他に依存して名前を与えられたことによって生じたのですから、存在していないのでもありません。このようにして、あるという有辺の極端を滅し、ないという無辺の極端も滅して、中道が説かれています。

つまり、縁起の見解に基づく空を主張する人たちは、探しても見つけることができないから何も存在しない、と言って虚無論を主張しているのではなく、縁起を理由として、自性による成立がないと主張しているのですから、すべてのものは真実として成立しているという実在論を述べているのでもありません。

対象物の実体はいったいどこにあるのか、という究極の分析を行なうと、そのような実体はどこにも見つけることはできないのですが、そのような分析をせずに「この条件（縁）に依存してこれが生じた」というように考えてみると、すべてのものは確かに存在しています。

このように、すべての現象は互いに依存関係を持つことによって成立しているだけであり、その実体がどこに存在しているのかを追及し、探求してみると、そのような実体はどこを探しても見出すことは

できないのです。

つまり、他に依存して名前を与えられただけのものとして存在しているのですから、ないのではなく、それ自体の側から独立して存在しているのでもありません。有辺と無辺の両極端を滅することはこのような意味である、とここに説かれているのです。

無いと執らえることの過失

第三の義：無いと執らえることの過失を説明するには、

では、〔対象・〕義を〔有為の〕事物だと執らえることは輪廻の根本としてあるなら、〔無為の〕非事物として見るなら、輪廻から解脱することになるのではないか、というなら、前より後は過失が大きいのです。すなわち、サラハは〔上のように〕、「事物と執らえるのは牛と似ている。〔事物として無い〕非事物として執らえるなら、それよりもまた愚かです。」

と説かれています。すなわち、^{ほうしゃくきょう}『宝積経 ^{かしょうほん}〔迦葉品〕』(訳註 42) に「カーシャパよ、人(に)としてみるのがスメール山ほどに住するのはいいが、増上慢により空性だと見るのはそうではない。」と説かれています。

またすなわち、『根本般若〔中論〕』〔の第 24 章「四聖諦の観察」に〕(訳註 43) に「空性を見誤ることにより、智恵の小さな者たちは破滅する。」と説かれています。『根本般若〔中論〕』〔の第 13 章「行の観察」に〕(訳註 44) に、「〔勝者たちは、空性は見すべての出離だと説かれた。しかし、〕空性を見る者彼らは治療しえない、と説かれた。」と説かれています。どのように治療しえないかという、例えば、病人に下剤を施したことにより、病と下剤の二つともが洗浄されたなら、病は治療されたのです。病を洗浄してから下剤が消化されないなら、病人は治療しえなくて、死ぬことになるのです。同じく、事物だと見るそれは、空性を修習したことにより破られたが、空性にこだわって見るなら、空である主体が空になり、悪趣に向かうことになるのです。

『宝鬘』(訳註 48) にもまた、「有るという者は善趣に往く。無いという者は悪趣に往く。〔二に依らない者は解脱するでしょう〕」と説かれています。そのうち、前〔の実有論〕より〔、因果を損滅する〕後〔の虚無論〕は、過失が大きいのです。

* 4. P.192-193

11. 空の間違った理解は

智慧の劣ったもの達を破滅させる

それは間違った方法で蛇を捕えたり

間違った呪文を唱えたりするようなものである

単なる信心によって空を知ろうとすると、「すべてのものはそれ自体の力で存在しているのではない、つまり本質がないのだから、存在しないのだ」などと考えることになってしまい、よく気をつけないと、何も存在しないという虚無論に陥ってしまう危険があります。

また、すべてのものは存在している、と言われると、私たちの目に見えている通り、その現われ通りに存在しているのだと信じている年とった母親のように、すべてのものは不変で、ずっと永遠に存在しつづけている、と考える実在論の極端に陥ってしまう危険もあるので。

つまり、知性の劣った者が空の意味を誤解してしまうと、間違っただ見解を持つようになってしまいます。

毒蛇をつかまえて役に立てようとしたところ、蛇の捕えかたを誤り、その毒によって自分が害を被るようなことになったり、あるいは呪術によって利を得ようとしたのに、正しく呪術をかけることができず、自分を害することになってしまうようなものなのです。

* 4p.184

よく考えてみるならば、「空である」と言われた時には、「あるのだ」と理解しなければなりません。何故ならば、「空である」とは、「その自性が空である」という意味なのであり、「自性が空である」とは、何かがあって、その自性が空なのだということを意味しているからです。何も無いものの自性が空であると言うことはできません。ですから、「空である」と言われたなら、「何かが存在する」と理解すべきなのです。

しかし、(中略) 空とは自性による成立がないことである、と言われると、自性による成立がないというのは、そのものの本質がないという意味だと解釈してしまって、本質を維持している現象それ自体が存在しない、と考えてしまっているのです。

(中略) つまり、「すべての現象はその自性による成立を欠いた空の本質を持つものである」という意味を本質がないことだと誤解してしまうと、因もなく、本質もなく、結果もないということになってしまいます。

すると、私たちがよい行いをして、よい因を作ったことからよい結果を体験したり、悪いことをしたために悪い結果を体験する、ということもなくなってしまいますので、つまりこれは虚無論ではないか、と言って、反論者たちはナーガルジュナの説く空に対して批判をしているのです。

●最後は法身の話…？（参考）

ガルチェン・リンポチエのおことばから、空性に関係しそうなところを探してみました。

生は幻 ガルチェン協会HP 資料「ガルチェン・リンポチエのことば」より

凡夫は、目に見える世界が真実で、夢の状態は真実ではないと信じておるが、一方でブッダは、この世界は夢のような幻想だと捉えていらした。ブッダたちがおっしゃるには、死後の中有では、私たちは「三悪趣は幻想だ」等々の紛らわしい顕現をみることになるであろう、と。すると、「もしこれが真実ではない夢のようなものだとしたら、そんなに悪くはないものだ」と考えてしまう人もいるかもしれないが、それは大変な錯誤というものじゃ。本質は幻想とはいえ、夢が続く限りはその夢は現実として経験されるのじゃから。この生は一場の夢のようなものじゃが、私たちはこの生のカルマが熟して終わりを迎えるまでは真実のものだと感じて、この生という夢から醒めることはないのじゃ。たとえば悪夢をみたら、夢をみている限りはそれを真実として経験するじゃろう。そして、意識的にな

って目を覚まさないかぎりは夢を見ている。死ぬとき、私たちはこの生という夢から醒めて、この生は曖昧な記憶になっていく。生きていたものが何もなくなるや否や、気づくともう新たな現実を掴んでいる。それが中有の状態じゃ。あなたがこの生は夢のようなものと理解したら、その中のあらゆるもの — 幸福も富も宝物も痛みも苦しみも — が無常であり、はかないものだとわかるだろう。すると、違う環境にそれほど圧倒されるということもなくなってくる。集中が保たれるようになり、快樂に耽ること流されることもなくなって、困難な境遇にもそれほど左右されなくなってくるだろう。私たちの生とは、オイルランプのようなもの。オイルはカルマで、火はこの生じゃ。オイルがある限り、火は続く。私たちの生は、この生のカルマが終わりを迎えるまで続くものじゃ。そして、心相續に刻み込まれたカルマに支配されて、次に進んでいくことになるのじゃ。(丸山博貴訳)

こちらに、中観自立論証派の考え方がわかりやすく書かれているように思いました。

野田俊作の補正項

「一隅を照らす」2013年12月30日(月)より <http://jalsha.cside8.com/diary/2013/12/30.html>

(前略) 春にガルチェン・リンポチェのマハームードラについての法話を聞いて、マハームードラ思想は《法身》を宇宙にただひとつ存在する意識ないし生命として理解していることを学んだ。同じものを中観思想は《空性》と呼ぶが、空性は否定的な言葉でつかみどころがないので、法身という積極的な言葉の方がつかみやすい。それを、光明と言ってもいいし、明知と言ってもいいし、智慧と言ってもいいし、清浄と言ってもいい。これらの言葉を使うときに注意しなければならないことは、光明は闇と対応していないこと、明知は無明と対応していないこと、智慧は愚痴と対応していないこと、清浄は不浄と対応していないことだ。すなわち《不二なる法身》なのだ。法身や光明などは、他のものとの差異でもって定義されるわけではない。だから空性と同義語でありうるのだ。

人間は世界を差異でもって言語化する。苦があれば楽があり、迷いがあれば悟りがあり、煩惱があれば菩提があり、輪廻があれば仏があると考える。それらの分別の根本に我執があると、ガルチェン・リンポチェはおっしゃる。すなわち、自と他の二項対立がある。我執があるために、ただひとつの法身から個体の意識が分れて、ここまですら自分、ここからは自分でないと、勝手に囲い込む。しかしそれは、我執によって恣意的に囲い込んだからできたのであって、我執がなければ囲いもなく、我は消滅して法身に合一できる。法身に合一すれば、苦もなければ楽もなく、迷いもなければ悟りもなく、煩惱もなければ菩提もなく、輪廻がなければ仏もない。それがほんとうなのだけれど、人間は我執があるので、苦があり迷いがあり煩惱があり輪廻がある。

空性から法身に言葉を換えてくれたおかげで、私のような鈍根の者でもさまざまなことが理解できるようになった。たとえば伝教大師最澄が「一隅を照らす」とおっしゃったのだそうだが、あれは闇の中で光をともしているわけではなくて、法身なる光明の中に暮らしていて、その中の自分の分担分を光らせているということなのだと納得した。つまり、世界は光であり、世界は幸福であり、世界は智慧であり、世界は慈悲である。私は我執のために世界から切り離されてしまっているように思っているが、それでもなお世界の一部であることを思い出せば、自分の分の光明に気づくことができる。

その光明は、気づいてしまえば、自分にとっては意味がない。周囲の、世界は闇だと思い込んでいる人にとって意味がある。だから、仏さまのおん光をいただいて、人々が闇だと思い込んでいる一隅を照らすのだ。照らさなくてもほんとうは光なのだが、しかし私が照らさない人々は闇だと思い込んだままだ。(後略)

最後はガルチェン・リンポチエのお言葉での法身の話を…

ガルチェン協会 HP 野田：翻訳者ノート 23 解脱の宝飾 より

せっかくですから、ガルチェン・リンポチエのお言葉を引用しておきます。

『法身普賢の誓願』の中に「基は一、道は二、果もまた二」とありますが、一つの基とはすなわち私たちの心の中の如来蔵を指しています。これを一本の大樹にたとえることができます。根部は深く深く大地の中に根を下ろしていますが、これを六道を輪廻する衆生に比べることができ、その上に葉や花や果実が伸びていきますが、それらを三身、すなわち法身・報身・化身の浄土に比べることができます。一つの基の共通の性質は、大海の全体にたとえることができ、仏のおかげで世界は何ものにも障碍汚染されておらず清浄なのですが、その中で衆生は我執のために固まって氷になっているのです。海と氷とは、たとえ形は違っていても、本質はすべて水なのですが、しかも同じでない状態を呈しているのです。私たちが利他の心を具備できれば、我執の氷が溶けてすなわち仏陀です。しかし自分を愛護する我執の心をもっていると、たとえ仏法を修行しても、なお輪廻の中に束縛されていなければなりません。この点に関しては『三十七の菩薩の修行』の中に、「すべての苦悩は自利の望みゆえ、円満諸仏は利他より生まれたり」というように説明があります。

[註4：ガルチェン・リンポチエ『藏密氣功』]

参考文献

- *1 『ダライ・ラマ 般若心経入門』ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ著、宮坂宥洪訳/春秋社
- *2 『ダライ・ラマ「菩提心の解説」』ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ著、マリア・リンチェン訳/大蔵出版
- *3 『ダライ・ラマの般若心経 日々の実践』ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ著、マリア・リンチェン訳/三和書籍
- *4 『ダライ・ラマ「中論」講義』ダライ・ラマ 14 世テンジン・ギャツォ著、マリア・リンチェン訳/大蔵出版